都留の今昔

米山朴庵

本名を登（旧名和蔵）といい、画号を朴庵、別号を停雲閣、湲素軒、六石堂と称した。

元治元年（一八六四）九月二十九日、山梨県南都留郡境村無番戸（境下屋敷隣家）に父天野栄衛、母かくの二男として生まれた。

明治五年（一八七二）八歳のとき境村の米山喜七の養子となり、境尋常小学校を卒業した。朴庵の青少年時代のこと、また、いつ滝和亭に弟子入りしたかは不明であるが、和亭が下谷村の小池三郎宅へ寄寓したとき弟子入りしたといわれている。

米山朴庵

滝和亭は、天保三年（一八三二）に江戸千駄谷に生まれ、画を大岡雲峰、また長崎の日高鉄翁に学び、山水花鳥画にその技を示し、明治二十六年には帝室技芸員を拝命した画人である。

朴庵が生れた時、和亭はすでに三十二歳であり、明治三十四年（一九〇一）六十九歳で没している。

朴庵がいつ結婚したかも不明であるが、東京市日本橋区富沢町皆川芳造の姉きぬと結婚し、牛込区若宮町二十番地に世帯をもった。

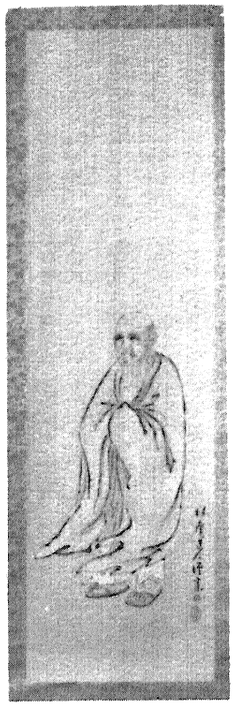
朴庵が三十九歳のとき、明治三十六年（一九〇三）八月九日に長男の実が出生している。妻の実家である皆川芳造は、傘問屋を経営し、晩年は日本テレビの重役をした人である。この調査で判ったことであるが、文化会館の小林館長の父宇之助が、東京で傘問屋を経営する以前（明治三十五年頃）に奉公したのが皆川商店で、その後皆川氏の世話で結婚し店舗を経営した。当時郡内地方では洋傘地の生産がさかんで、当然郡内との関係があったものと思われる。館長所蔵の朴庵筆「達磨大師像」の引き合せであろうか、まことに縁とは不思議なものだと痛感した。

和亭の作品は野田市に多くあるが、当時和亭は野田町の醤油醸造業を経営していた茂木七郎右衛門（万延元年二月二十四日生昭和四年四月十九日没）宅に寄寓して絵を描き、またその後も親交をつづけた関係で、朴庵もその供をしては茂木氏宅を訪ずれ、以後親交を深めていった。和亭没後も遺族の世話をしていたらしく、和亭の絵や調度品を持参して買い求めてもらったと

いうことである。

朴庵は当時自宅の二階を画室にしていたが、茂木氏の注文を受けると、描きかけの絵を二階に広げておき、下の座敷でほかの注文の絵を描いていた。それは茂木氏が時々上京しては絵の

屏風絵（158 × 152㎝）
（小池喜代子氏所蔵）



「達磨大師像」（小林貞夫氏所蔵）

催促に訪問していたらしく、茂木氏が来ると急いで二階へ馳け上がって熱心に描いている様子を見せていたということで、お互に気心を知りつくした仲であった。

朴庵は、大正初年に茂木氏宅の襖絵二十四枚を弟子の栗田蘭林（野田市出身で茂木氏の世話で弟子となった）をつれ、二か月間住込んで揮毫している。

絵は水平線を遠く打寄せる波に対決する毅然たる巌と、広大な海原の旭光に乱舞する数千羽の千鳥が繊細に描かれ、奥行と気品が感じられる襖絵である。

この部屋において、同族八軒によりキッコーマン醤油合併の調印が行なわれ、大正六年十二月七日に会社が創立され、現在の会社繁栄の礎が築かれたのである。朴庵の喜びもまた一しおであったであろう。

和亭は、明治三十四年（一九〇一）六十九歳で没したが、病床にあるとき未完成の絵が気にかゝり、弟子の一人に筆入れをさせ完成させたいと思い、弟子一同を枕許に呼びよせその中から朴庵を指名したのである。

その数日後に完成した作品をみて、和亭は非常に満足したということである。いかに朴庵が師に信頼されていた画家であったかを物語る逸話ではないだろうか。

朴庵は細面の痩せ型であり、性格は潔白な芸術家肌の人で、自分の描く作品についても厳しく、依頼された人物画を描いたところ、丁度鼻の所に絹本の瘤があった。依頼主は承知したが、どうしても気にいらず渡さなかったということである。

絵の賛も「一塵不到処」と書き入れており、画界の派閥関係

や、師のえこひいき等が嫌いで、当時の展覧会への出品は、ついに一度もなかった。卓越した技術をもちながら当時の画壇の在り方に反抗し、名声を欲しない立派な芸術家ではなかっただろうか。

食べ物についても病的なくらい神経をつかい、菓子類はできたての温いものでないと食べず、刺身類も俎板を熱湯で消毒して料理したものでないと食べなかった。

横町の小池三郎一家とも親交があったが、朴庵が来ると奥さんを始め家族が非常に気をつかったということである。

趣味は当時としてはめずらしかった写真機を持ち歩いて知人を撮っていた。

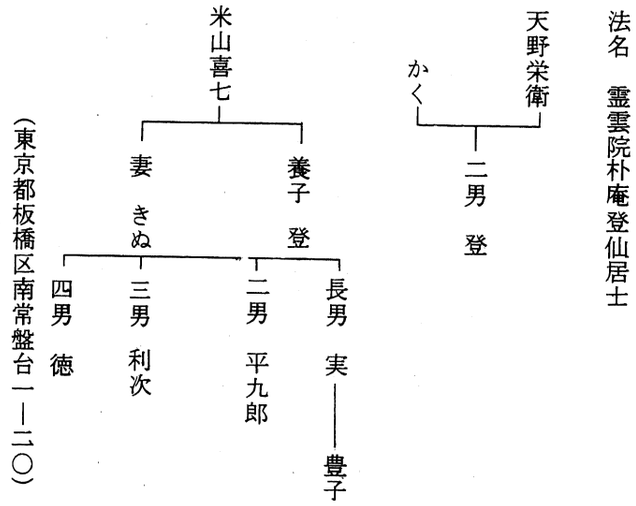
囲碁も和亭とともに好きで、子息の徳氏の話しでは初段程度の実力があったようである。囲碁といえば、朴庵の四男徳氏は戦時中呉清源とともに支那に渡り、親善を兼ねて陣中慰問をして来たという方で、今も壮健で囲碁の指導をしている。

朴庵の叔父に当たる天野隆蓁は、早くから実業方面に志して企業熱に燃え、村内をはじめ谷村に進出して製糸工場や、製菓、醸造業などつぎつぎと経営し、明治十五年から十七年に山梨県会議員となった人で、事業が隆盛のころ東京の遊郭の門を閉めきり豪遊したという逸話が残されている。

朴庵は小池三郎氏の長女淳子さんの誕生祝いのため雛祭りの絵を描いている時に脳溢血で倒れ病床の身となった。雛祭りの絵は遂に未完成のまゝ終ったが、記念のため頂載し現在小池家に保存されている。

昭和三年十二月二十五日、ついに薬石効なく若宮町の自宅で六十四歳の生涯を終わり、吉祥寺に葬った。

法名　霊雲院朴庵登仙居士



（東京都板橋区南常盤台一—二〇）